



ほわわあ

福士 りか
(青森)

雪の音をとどめて眠る夜の耳の槌骨、砧骨、鍍骨

太郎の屋根、次郎の屋根の境なく村を包める藍白の雪

雪嵩と雪質が見えてからでよい白湯を飲みつつ日の出を待てり

古古古米なれど炊きたて塩むすび温し美味しよいざ雪かきに

長靴の外にズボンを出して履くけふは膝たけ越す雪なれば

屋根雪はいかにと見ればほわわあと猫が窓辺でアクビする見ゆ

除雪車が路上を削ぎ寄せし雪イグラーのごと積まれて緊まる

相棒の小型除雪機かたゆきに噛みつきしまま動かずなりぬ

「アツハツハ凍みれば豆腐も固くなる」向かひのミヨさん堅雪を蹴る

雪かきを終へたるわれに猫が言ふ春には溶ける雪にやあらむ

猫は〈謎〉の集積体なり腹話術猫のキティを筆頭として

老人が日にいくたびも雪をかかぬ家の家もこの家も、どの家も

晩酌の必要十分条件のたとへば「塩辛ならば熱燗」

旧仮名は誤りやすし「あつかんを一合」「あつくわんのパフォーマンス」

雪解けの速さ増しゆく三月の嬉しけれどもあの〈夏〉が来る

このごろの私

三月の私は、相変わらず庭に積む雪を片付けています。でも、この五月号が届く頃、津軽は桜の園になっっているはずです。四月の私は、桜の下に寝転んで空を仰いでいることとしましょう。



手書きのレジュメ

秀島 美代

(佐賀)

このごろの私

この二月、前支部長として長くご指導頂いた小嶋一郎氏が亡くなられた。厳しい闘病の中、最後まで私共の歌を見て下さった。梅の香の漂う穏やかな日に旅立たれた師への感謝の念を新たにしている。

ともなはれ娘と参詣かなひたる今年も御籤を引かぬとも吉

丙ひのちま午の年に生まれしははそばのははは悩みきその迷信に

干支えとなんかどうでもよろし動物になぞらへられて傷つく人ゐる

知名度は劣る地元の神崎が元宮の榎田神社にまゐる

遠山は雪をいただき生垣の山茶花赤くけふ寒に入る

記憶力にぶるは術なしメモるべしたとへば非核三原則を

戦時中教へられたる覚えあり「世界の真ん中に日本」と聞けば

グリーンランド、コルティナの位置知りたくて子らが使ひし地図帳ひらく

恐れぬし計報はつひにけふ届きわれらは歌の師をうしなひぬ

穏しくも二度と笑まへることのなき師のかんばせに胡蝶蘭添ふ

寝たきりとなりてもいちにち二首づつを添削されき佐賀支部のため

師の柩見送りし帰路のをちこちに梅咲き蒼き空冴えわたる

初心者のところから続く師のレジュメ「結句について」をまた読み直す

もう増えてゆくことは無し端正な文字ならば師の手書きのレジュメ

師の言葉こころに残る「口語体のうたのみ詠めば伝統廃る」